

---

# スーパー口ボット大戦OG～チートで歴史を変える少年

絃城恭介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スーパー口ボット大戦OG～チートで歴史を変える少年

### 【Zコード】

Z8638M

### 【作者名】

絃城恭介

### 【あらすじ】

神様の手違いによつて殺され、チートな力を得た少年がスパロボOGの世界で愛したり愛されたりしながら戦場を駆け抜けるお話。原作なんて関係なくいくお～

## 少年は離つた（前書き）

間違いがあったので修正させて頂きました

## 少年は甦つた

極めて遠く限りなく近い世界

「ソルは……違つ……」

誰かが咳く

「私は……過ちを犯した」

「探さなければ……『門』を開く『鍵』を……そして……創造主の下へ」

\*\*\*\*\*

「やつとプロローグ終わつたぜ、やつぱ何回やつてもスパロボは面白いな」

部屋の画面に向かつて一人咳く少年

「ふう、喉渴いたしコンビニでジュース買おつひとつ」

この行動が彼の人生を大きく変える事を少年は知らない

「つか、何で夏休みなのにこんなに人がいねえのかねえ」

ぶらぶらと歩きコンビニに向かつ。地面をふと見ると何かが落ちていた

「何じや」「いや、何かの腕輪か?まあ、後で交番に届けるかなつー?」

猛スピードで俺に向かってくるトラック、何故気がつかなかつたのだろうか

ブォーン、ガンッ、ドサッ

そのまま勢いを緩めずトラックは俺に激突して俺は意識を失つた。

⋮  
⋮  
⋮  
⋮  
⋮  
⋮  
⋮

「いやー、参りましたねえ。まさか死んでしまうとは

あれ?俺死んだんじゃないの?

「まあ、起きなさい

ペちペちと頬を叩かれる

悪いが死んでるんだから眼を醒ますはずがない

「ええい、起きろ」

ガスンツ、鳩尾に一撃入れられ俺は眼を醒ました

「遺体を粗末にあつかうんじゃねえ！！」

あれ？俺生きてる？

「貴方は自分が死んだと分かつてるんじゃないですか」

「あれ、て事はやつぱり死んでんの？」

「ええ、貴方は運悪くトラックに轢かれて見るも無惨な形で死にましたよ」

いや、でも俺いつひつて話しじゃ無いですか

「つまり、ここは天国です。と言いたい訳ですが貴方を逝かせる訳には行かないんですね」

「天国つー？」

つてことはコイツ神様？

「ええ、私神様ですよ」

あれ？何か心読まれてる？

「そりやあ神様ですから」

「ですよねー、で何で天国に逝けないんですか?」

「いや、別に生前悪いことした覚えが無いんですけど

「ああ、それなら違います。貴方は手違いで死んでしまったので別の世界に飛んで貰う予定なんですよ」

「はあ、手違いって事は俺を殺したのはおまえかあああーーー」

「いやー、あんな、間違つちやつた。てへー」

「偉く軽い神様です」と、また、別世界に飛んで貰うだつて、

「ええ、何だつたら行きたい世界の選択もさせてあげるみー。オマケ付きで」

「オマケ付きつてどうこいつ事なんだ?」

「例えばお金ひよーだとかね」

「うーん、死んだ実感湧かないなあ。それに何か違和感が

「だって貴方靈体だしね、早くしないと適当な世界にぶしき込むわよ

「

「うわあ、良い笑顔ですね神様よ。

「じやあ願い事をひづぎ

「じゃあスパロボOG2の世界で、オマケはオリジナルの機体と俺の身体能力最強で頭も天才にしてください。あとは…… etcetera

「貴方、遠慮ないわね。まあ、だいたい解ったわ。それで良いのね？」

もつもつと事言つたし良いよね

「じゃあ、新しい人生楽しみなさい」

俺は足元に開いた穴に落ちていった

「神様のばかやうおおお～、先に言えよー。」

そして気がついたら俺は何かの中に座つていた

「……」

WARNINGWARNINGWARNINGWARNINGWARNING  
WARNINGWARNINGWARNINGWARNINGWARNING  
WARNINGWARNINGWARNINGWARNINGWARNING  
WARNINGWARNING

モニターにはWALKINGの文字が浮かび、目の前のレーダーが赤く染まる。数はおおよそ三十機

「やっぱり俺死ぬ運命なのか！？」

くそつ、相手の機体は……ゲシュペンストMK-?にソウルゲイ

ンつて事はアクセル達か！？

通信回線を開いておく、いつでも会話できる様に。いや神様、ホントにすぐに思ったことの答えが出てくるから天才って凄いですね

（だつて神様だもん、何でも出来るわよ）

「うおっ、頭の中に声が」

（良い反応ね 私に用があるときは読んでくれればすぐに聞いてあげるわよ）

「神様、貴方は美人何ですからもう少し……」

（あら、こんなこと話していいのかしら？）

いつの間にか敵機が近付いて来ている

「もつと早く教えてくださいよーー！」

（いやよ、だつて私が楽しめないじゃない）

「すみませんが今は戦闘を優先しますね」

（解つたわ、頑張つてね）

神様の声が聞こえなくなり集中力が高まる

武器はレールガン、大型アサルトナイフ一本、リボルビング・バンカーと五連チェーンガンにブーステットライフル、最後にエミュレ

二オン・エッジ、あれ？最後の武器つて俺の考えた機体の武装つて事はこれつてラグナレクなのか？

「えっと、機体情報展開つと」

機体名・ラグナレク

サイズM、万能型

マジで俺の考えた機体じゃんか

「神様、俺の夢を有難うございます」

試しに五感を最大限まで引き上げる。ラグナレクはファイードバックシステムを採用した機体でパイロットの能力も大きく反映される。某ガン○ムのシステムを創造して作られている

「超速展開、分割思考、システムロール完了。行けますマスター」

それに追加して某魔法少女のインテリジェンスデバイスの人格より高性能なAIを搭載している。エネルギーは地上では空気中の水素を取り込み、宇宙では真空をエネルギーに変えて半永久的に起動出来る様に出来ている

「よし、行くぞラグナレク」

「OKマスター」

俺は大型アサルトナイフを両手に持ち戦場に駆け出した  
SIDE アクセル

「突然レーダーに反応だと？」

「ええ」

おかしい、このタイミングだと連邦が来るはずなんだがな  
「Wシリーズ、先に行つてアンノウンを出来るなら確保。無理なら  
最悪破壊してこい」

「了解」

それにしておきだ、俺はこの人形が好きではないんだがな。

さて、俺達と同じ存在か正体不明か。作戦に問題が無いのならビッチでもいいがな

「た、隊長！！」

「どうしたつ？」

「敵が強すぎます！」

どういう事だ、Wシリーズはそれなりに使えるはずなんだがな

「解つた、俺の本隊を連れてそっちに向かう。それまで耐えろ

「了解」

「ソウルゲイン、アクセル・アルマー行くぞ」

とりあえず様子見だけでもしておくれ

SHDE OUT

「よし、三十機撃墜完了。意外に楽だったな、ラグナレク?」

「ええ、予想より下の戦闘でしたね」

「まあ、俺達チートだし」

「マスター、チートとは何ですか?」

「ありや、語源設定までは完璧じゃないのか

まあ、後々教えるよ」

「解りました」

「つと、まだいたのか」

しかもソウルゲインか、どうしようかね。まあ、話してもして逃げるかな

回線を通して声が聞こえる

「おい、貴様何者だ?」

まあ、確認も兼ねて聞いてみるか

「俺はただの民間人だが、いまはそれはどうでもいい。」

「なに！？」

「もうエクサランスのパイロットは誰か知っているか？」

多分今の時点では知らないはずだ

「何を言つて居る？」

「情報提供どいつも。ラグナレク、ハイパー・ジャマー」

「了解

「逃げられると思うのか？」

「逃げるんじゃない、消えるだけだ」

ラグナレクがレーダーから消える

「何処だつ！？」

「へへ、逃げられたか

悪いが今は逃げるのがベストだしな

ソウルゲインが後ろを向き部隊に戻つていった

「とつあえず今は隠れ家でも探さないとな」

「隠れ家とは?」

「ああ、俺達はしばらく隠れながら情報を掴む」

実際のところ今ほどの時系列に存在しているのか気になるしな

じぱりくはジャマーで野宿覚悟でいくか……

「ああ、何か異世界に来たつて実感が湧かないなあ」

「?」

「気にしないでくれ、ラグナレク」「  
（くすくす、貴方も面白い人ねえ）

突然頭に声が響く

「つあつ……」

「チンジ、と頭を「ツクツク」ぶつけた

「どうしましたかマスター?」

「い、いや、何でもない

（無視するなんて酷いわねえ。しくしく）

おこ、今時しへしへなんてやらねえよ

えーと会話するこま頭で言葉こ……って、これ聞いじてるー。?

(ええ、バツチリ聞いじてるわよ)

やべえ、何かここここここここここ

(やうやうここここここここここ)

やめてくれ、そだ無心になれば…………なれねえよー。

(まあ、全部聞いえりこれ以上からかつと話しが進まないからや  
めるわ )

本当の神様俺で楽しむためだけこの世界に送つたとしか考えら  
れん

(実際そつよ あと貴方、腕輪はまだ持つてる?)

断言いやがつた、ん?腕輪つて…………これが。これがどうしたん  
だううか

(それ無くしちゃダメよ。理由はめんどくさいからいいわ)

随分アバウトな神様デスこと

(あと隠れ家が欲しいんでしょう?私が用意しておいた場所があるか  
らそこを使いなさい。座標は貴方の機体に入れておいたわ)

「ラグナレク、隠れ家で座標を出してくれ」

「了解」

（うふふ、多分出るはずよ）

多分つてのが気になるんですけど

（頑張つて男の子 ）

とかやつてるつひて座標がでる  
「座標出ました、位置はだいたい…………」の辺りです

モニターに地図が出て黄色い点が表示される

「俺地形よくわかんねーから自動飛行頼めるか?」

「了解です」

とこう訳で自動飛行に設定したのだが

「やべえ、揺れも無いし飛行音とかバーーニアの音すら聽こべねえ」

非常に乗り心地がよくて寝てしまつた

「ぐつ」

少年睡眠中～…………約一時間後

「マスター、到着しました」

「う、うん？ ああ、着いた…………のかあ」

欠伸を漏らしながら確認を取る

「到着したはいいのですが此処は？」

田の前に広がるのは瓦礫の山

ちょっと待て、隠れ家だよな此処は？

（大丈夫よ地下があるから）

先に説明して下さいよ

（入口はあの石像の下よ）  
無視ですか、都合が悪くなるとそいつくるんですね

（じやあ頑張ってね）

何を頑張ればいいのだろうか

ついでに、いまさらになるが俺の名前は浅上遼だ

こっちでの戸籍がどうなっているかなんて知らないから後で調べる  
つもりだったが

「結構広いな。それにこれは……」

格納庫にラグナレクを置いて部屋に向かってみると使われた形跡の

無いオペレーションルームがあった

「新しいな。神様本氣で楽しむつもつですね」

（ええ、貴方は仲間でも集めたらどうかしらへ。）

「それは後々やるとして、戸籍とかはどうなつていらぬんですか？」

（無いわ！）

速攻で断言された、まあ予想の範囲内だが

「何とか出来ませんか？」

（仲間作つて戸籍改竄しちゃえば良いじゃないの）

「聞いた俺が馬鹿だつた」

この会話から一年後に俺は過去に飛びのだつた

## 少年は離つた（後書き）

間違いの指摘をしていただきありがとうございます

まだまだ至らない所が多いですがよろしくお願ひします

少女と少年は向を思つのか（前書き）

じばりくはオリジナルストーリーで行きます、本編はじばりく後に  
なります

## 少女と少年は何を思つのか

隠れ家の掃除が終わり、俺は備品を買い集める為に近くの街まで買い物に来ていた。そして何故かお金は金庫に大量に入っていたので必要な分だけ持つて来ている。

ちなみに神様が言つには「貴方の生活、その他の事に必要がある物はある程度だけどそこに置いといたから人生楽しんでね～」だ、そうだ

てくとく

まあ、食料やら生活用品が無いので車と家具を揃えないといけないな。近くに大型の百貨店あるかな?

てくとく

必死に見ない様にしているんだが何故か俺の後ろをまだ8～10才にしか見えない少女がついて来ている

てくとく、ぐう～

お腹が空いてるのか?仕方ないな、金が無い訳では無いので少女に話しかける

「お～い、お腹空いてるなら何か買つてやるから」つりあこで

手招きを小さくやると少女はとととと走つて来た

あ、転んだ。何か痛そうだな、頭でも撫でてあげるか

手が少女の頭にのる

なでなで、少女は眼を細め気持ち良さそうに手を見上げて言った

「お兄ちゃんありがと~」

「いやいや、お礼なんていいよ」

見た感じは可愛い、きっと将来は美人だな

「どじいで君の名前教えてくれないかな?」

「いいよ、私はルナっていうの~」

ああ、そうだった。どじいの名前ってゲーム上ではカタカナなんだ  
つけ

「ルナちゃんね、家族は一緒にないの?」

「家…族?私の家族はもういないの」

いない?もしかして戦災孤児か。

「どじいで暮らしているんだい?」

「独りでお家にいるよ」

そつか、まだこの歳なのに一人は辛いよな

「お兄さんと一緒に暮らさないかい？少し平和とは離れちゃうけど

ルナちゃんが俺と暮らしたいなら俺はこの娘を引き取るかな

「ここなの？」

「本当にここよ、買い物ついでに子猫拾つたみたいなもんだし。何より俺が誘ったんだから」

ルナちゃんは少しも考へることなく俺の手を握つてきた

「迷惑かけるかもしだせんがよろしくお願ひします

ペーツと頭を下げた、手を握つていたから少し苦しそうだったが一言一言していた

「うわあよろしくねルナちゃん。あと俺の名前はリョウだから好きに呼んでいいよ

「うそ、じゃあお兄ちゃんって呼んでいい？」

「良つけど何でお兄ちゃん？」

確かに年上だし疑問はあまりないが少し抵抗がある

「優しい匂いがするから~」

えへへ、と小さく笑い横に並ぶ

「じゃあ先に」)飯食べにい」)つか

「うん、ルナはケーキ食べたいな」

ま、仲間では無いけど家族にならなれるかな?

少年少女食事中～約2時間後

「結構食べたねルナちゃん、太つたりや」

「太んじゃないもん、私運動もするもん。あと、ちゃん付けないでいいの～」

顔を膨らませてポカポカと呴いてくる

「じゃあルナって呼ぶけどいいのかい？」

「うん」

「じゃあこりこりと買つたし一回帰りつか、ルナ？」

「買つたつてわの車とかの」と。

わつも食事をする前に車に家具一式と服を買つておいたのだ。いつの間に買つた?とかは秘密だぜ

「わつだよ、欲しいものあつたら今度買つてあげるからね」

「ありがとう～お兄ちゃん。」

ルナを助手席に乗せて車を出す

「お兄ちゃん運転上手いね、全然揺れないよ～！～。」

ルナは誰かと一緒にいる事が嬉しいのかとにかく元気だ

「ありがとう、でも少し静かにじょうづな」

「うそ、『めんなさい』」

言えぱすぐ聞いて直せるってのは凄い」とだな、手がかからない  
ぶんぢゃんと一緒にいてやるわ

と俺は誓いを心の中で立てたのだった

そして、隠れ家に到着した

「此処がお家なの？」

まあ、当然の反応だな

「やうだよ、此処がお家だよ」

「お兄ちゃんつてお金持ちなのにお家無いの？」

「冗談だ、お家ないの？」。地下だよ」

少年説明中～

「わあ、広いね～」

最初の俺と同じ事言つたよこの娘

「生活区は此処までだから用が在るときはいいで暮らすから」

ちなみに格納庫やオペレーションルームの説明も一応したら、ルナが

「私も乗りたいな」

と言つたのでラグナレクをもとに設計図を作成する予定だ

「じゃあ、部屋の模様替えするからルナも手伝ってくれるか？」

「わかったの～」

ルナは大きく手を挙げて頑張るぞ～と言つてこの

「あ、そうだ。聞きたれただけ同じ部屋でいいの？」

「そつちのほうがルナ嬉しいな

「じゃあタンスとかの位置決めないとな

少年少女仕事中～

「よし終わつた～

「終わつた～」

ルナは疲れたのかつとつとしながら走っていた

「少しルナは寝ようか」

「うそ、寝るの」

ルナを抱き上げてベッドまで運ぶ

「すうすう」

運んでる最中にルナが寝てしまったのでまっぺを突いてみる

ふにふに、柔らかい。ルナは「ふにゅー」と鳴いたが起きなかつた

のでそのままベットに寝かせてあげた  
「さて、俺は設計図でも描きますか」

これは少年が少女を街で拾つてきたお話

## 少女と少年は向をつけつか（後書き）

意外に読んでくれている人が多くてビックリした作者です  
駄作ですが読んでくれる方々がいるかぎり私は頑張るつもりです  
で何とぞよろしくお願いします

## 駆け抜ける」と

俺はルナの為に設計図を描いていた。機体名はナイトメアと名付け、今は機能面での考察中である。構想設定は大分浮かんでいる、説明をするならこうなる

- ・ステルス（ハイパージャマー）による一撃離脱を基本とした機体
- ・小型のサイズで敵を攪乱する
- ・高機能AIによるサポートが出来る安全設定

まあ、こんなものだよな。まずルナは戦争に参加させたくないが身を守るという点もあるから仕方ないな

ガチャツ、という音と共にドアが開き茶髪の少女が突っ込んできた

「お腹すいたよお兄ちゃんああ～ん

ドガツ

「ぐへえっ、ちよ、ルナ。痛いからやめてくれ

「お腹すいた～、『飯』～！～」

「わかつたから、『飯な？今作るからちょっと待つて！』

俺がいい終える前にルナは「わかつた～」といい俺の服の袖を掴んでキッチンに引っ張つて行こうとする

「わ、わわ。引っ張んなくとも行くから」

俺は設計図を引き出してしまいルナとキッチンにむかつた

…………少年料理中

…………少女お手伝い中

「出来たからルナはテーブル拭いてくれないか？」

俺はフライパンを火から下ろし皿に盛りながらルナに頼む

「うん、わかつた～」

え～と、中華だし箸でいいかな？

テーブルに料理を運ぶ、メニューはチャーハン、麻婆、エビチリの  
三種類だ

どうやらルナもテーブルを拭き終えているようだしちょうどいいな

「ルナ、キッチンから箸とお皿持つて来てくれないか？」

ルナは頭を二くつと振りぱたぱたと走つていき、戻つてきた

「持つてきたよ～」

「うん、有難うな

椅子を引き、テーブルに着く

「じゃあ食べようか、ルナ

「うん、頂きます」

ルナは一通りお皿に盛ると箸を手にとり食べている。その顔はとても美味しそうに食べているので作った本人としては嬉しいものだ

「じゃあ俺も食べるかな」

まずエビチリを食べる、久しぶりの料理だけど大丈夫だな、チャーハンと麻婆も食べるが特に問題も無く美味しかった。

ぱくぱく、もぐもぐ、じくん

「『』かわいいですね（でした）」

二人仲良く挨拶をすると皿を洗い俺はオペレーションルームに向かつた

「ルナ、ちょっと出掛けるからこい子にしていてくれよ？」

「うん、わかったよ」

ルナが部屋に戻るのを確認してからオペレーションルームに入つた

「さて、ハッキングでもしますかねえ」

すべての機械に電源をいれる  
液晶に文字が映る

『パスワードを入れてください』

パスワードなんて知らない、なにを打てば良いのだろうか？

（えーとね、パスワードは大神宣言グングニルよ）

いい加減慣れてきた、いや～慣れっていやだね

（ちょっと、人がせつかく教えるのになによ～）

まず人じやあ無いですよね、神様ですよあなた

（うう、酷いわリョウ君）

てか、いつの間にか名前で呼ぶようになったんですか？

（テフオ よテフオ）

意味が違いますよ？

（…………うわーん（泣））

あ、ガチ泣きして逃げた！？

後で謝ん無いと命がああああ

まあ、大丈夫かな？とりあえずパスワードを入力しないとな

カタカタカタカタカタ

## ピツ、ピー

『承認完了、アクセスの許可がでました』

これでいろいろと調べる事が出来る

まずは片っ端から軍の研究所とか施設を調べるか

カタカタカタカタカタ

ブロツクがきついな、けどそんなのじや俺からは逃げられない

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ  
カタカタカタ

『アクセスを開始します』

やつと通つた、えーと裏にアクセスしないとな

カタカタカタカタカタカタカタ

『検索にヒットした件数2500』

更に絞り込まないとダメだな。何かキーワードは……改造?いや、強化だ

『絞り込み中……検索件数15、ページを開きます』

15件か、予想以上に少ないな。これは用紙にコピーをかけてつと、後は軍人の名簿と顔写真、それと量産機体の資料を見つけないと

ピー、ガツガツガツガツガツガツガツガツ

ウイーンウイーンウイーン

ガツガツガツガツガツガツガツ

ウイーンウイーンウイーン

ピー

『印刷が完了しました。』

終わつたみたいだな、とりあえず見てみるかな

ペラペラ、ピタッ

これは酷い、生存者は三人だと?しかも子供だ

「この人数なら助けられるな、仮に仲間にも出来る」  
まあ、仲間になるならには置いといて助けに行くか

パソコンの電源を落とし、印刷した資料を纏めるとそれを設計図の  
入った引き出しにしまう為に部屋に戻つた

「これで本当にお出かけだな」

お昼寝をしていたルナの頭を撫で「行ってくるよ」と俺は言い格納  
庫にあるラグナレクに乗り座標を指定する

「ラグナレク、今日は殲滅戦だ。行くぜ」

「了解しました、マスター」

モードをハイパージャマーに設定して自動飛行に変える

……少年移動中

「着きましたマスター。」

「結構速かつたな、今回で完璧にお前に慣れる為に頑張るよ」

俺はラグナレクで研究所の壁を壊した、勿論誰も居ない倉庫を破壊した。何だかんだ言つても人を殺すのは嫌だ、責任を持つのが嫌ではないし寧ろそれは割り切れる事だ。

まあ、もつ覚悟はあるさ。それくらいの事を俺はこれからもやり続けるんだからもう割り切ろう

「よし、ジレンマはもう克服した。子供達を助けるか」

その時警報が鳴り響いた

「くそ、もう氣付いたか」

レーダーの反応数はだいたい8機、まあこんな研究所じゃ良い方か

俺は回線を開いて告げた

「聞け！俺はＲＯＫＥだ、貴様等の醜悪な実験を受けた子供達を貰いに来た。素直に受け渡すなら見逃してやる」

「何処だ！？姿を現せ！！」

レーダーに反応が無く慌てている様子がまるわかりな返答が帰つてくる

「答えを言った後に出てやる、先に答えひー。」

「くつ、貴様の様な得体の知れない者に実験台を渡すかつーー。」

その一言が俺の何かを切つた

プチンッ

「答えはひーで良いんだな？」

苛立ちを隠せずに声に出てしまつ

「ああ、答えたのだから姿をあらわ……せーーっ。」

ヒュンヒュンヒュン、ザンッ

敵の機体の首が跳ねられ手足を切り裂かれていた

「お前等は此処で始末する、姿を見られたら殺さないといけないんでね」

正にそれは一瞬の事だった。黒い影が現れた瞬間に残り七機はバラに解体され爆発した

「さあ、お前が最後だ。覚悟は出来ていいか?」

「は、は、はは、化け物め……」

「ふん、自分の愚かさに気付けぬまま死ぬか。じゃあな……」

俺はリボルビングバンカーでコックピットを貫いた

「魂に価値があるならお前等はどれくらいあったのかな?」

俺は何故か呟いていた。何故かそれはとても悲しくて悔しかったからなのかは解らない。

ただ一つ言える事は子供達を助ける為に俺はやつたといつ事実のみだ  
そんな事を考えながら俺は子供達のいる部屋に入った

そこにいた少年と少女は震えていた。毎日の実験に怯えて居たのだろう

「お、お兄さんはだれ?また僕らを虐めに来たの!?」

一人を守る様に一人の男の子が俺に聞いてきた

「此処から逃げたいって思つた事はあるか?」

俺はそんな事と一緒に蹴し少年に尋ねた

「当たり前だろー」んな場所逃げれるなら逃げたいさ」

「だつたら一つ聞こい、俺と……家族にならないか?」

俺は堅苦しい言い方をやめて聞いてみた

「俺は君達の様な存在を救う為に今此処にいる。どうだい?」

「そ、そんな……おい、カンナ。何を!?」

カンナと呼ばれた少女は俺の所に来て俺の顔をマジマジとみて言った  
「この人、いい人だよティーダ、ヴァン君。とても綺麗な眼をして  
るもん」

「カンナ、何をいつて?」

「お兄さん、私家族欲しいよ」

この少女は不思議な何かを持つていてる気がした

絶望的な状況で生きてきたはずなのに心がしつかりとしていた

「ああ、君がそういうなら歓迎しよう。そっちの一人はどうするか  
?」

「カンナがそういうなら俺も家族になる」

ティーダと呼ばれた男の子は俺の眼をまっすぐに見つめて言った。  
それに倣うかの様にヴァンという少年もお辞儀をしてきた

「じゃあ二人は俺の大事な家族になつた訳だ。家に帰ろうか」

一  
うん

カンナという少女は俺の手をしつかり握り歩いていた。もう一人は後を追う様について来た

「ラグナレク、乗れるか?」

「なんとか入るでしょう」

俺がラグナレクと話していると三人は眼を光させて聞いてきた

「何で言つ機体な（の）（んだ）」

「とにかく先に乗つてくれ、帰れないだろ?」

「こりや、後二機は設計図描かないダメだな

少年少女移動中

「着いたから降りるぞ」

三人に向かつて言う、三人は素直に降りたが眼がかわいそうな人を見る眼をしていた

「待てまで、此処の下だ

まあ、ルナも勘違にするくらいだから仕方ないか

「下？地下にあるの？」

「もううだ、入るぞ

入口の扉を開いてなかに入っていく

「よつこや、我が家へ」

格納庫を越え生活区に入つてからの三人は初めて見る環境に驚いていた

「あ、お帰りお兄ちゃん」

「ただいま、ルナ。早速だけど新しい家族を紹介するよ

俺の後ろでキヨロキヨロとしている三人を前に出す

「さあ、自己紹介だ」

「私はカンナです。貴女は誰？」

「ルナって言つて、お兄ちゃんに拾われたんだ」

「何故そんなに嬉しそうなんだ、ルナ？」

「俺はティーダ、一応三人の中では兄貴みたいな立場だ。よろしく

「僕はヴァン、仲良くなつうね」

「という訳で、晴れて俺の家族になつた訳だが先に一つ言つておくれ  
ぞ」

四人は振り返りこつちを見る

「世界は一つじゃない、俺は近い内にこの世界を離れるつもりだ。  
そこで一つの確認をする、俺について来るかついて来ないかを」

「お兄ちゃん、どういう事?」

ルナは意味が解らないと俺に聞いてきた

「俺は別の世界でやらなきゃいけない事があるんだ。それにお前達  
を無理矢理連れて行くなんて俺には出来ない、だからお前達の言葉  
を聞きたいんだ」

「お兄ちゃんは私たちの事をどうしたいの?..」

「本当は離れたくなつせ、俺が拾つて家族にならなかんて言つ  
て連れて來たんだからさ」

そうだ、置いていくなんてのは無責任じやないのか?

いや、でも俺の意思では勝手に決めちゃいけないだろ?

「一つのジレンマに焦がれる俺にルナは言った

「私はお兄ちゃんがいるなら何処にだっていいよ。」

その言葉は俺にとっては救いだった、その言葉に倣つかの様に残りの三人も言ってくれた

「僕（私）達もついて行け！」

「有難う、これで俺も家族として暮らせるよ。ちなみに別世界つてのは極めて近く限りなく遠い世界だ、間違いない今よりは幸せな暮らしを俺が絶対に約束してやる」

話を終えると新しい家族に部屋をあげた。

そこから一年はとてもとても幸せに家族みんなで暮らしていた

そして運命の日、俺はその日に間に合ひ様に神様に設計図を渡して機体を改めて四機創つて貰った

（今回でリョウ君の手云には終わりね、後は私は観測者として傍観させて貰うわ）

今まで有難うございました神様、でもまた気が向いたら俺と話すつもりですよね？

（あら？なんでそういう思ひのかしら）

俺が知る神様はそういう神様だからですよ

（嬉しことく言ってくれるわねリョウ君）

いえいえ、じゃあ俺達は先に行きますね

(わかつたわ、じゃあ最後まで見届けてから私は行くわ)

じゃあ言っできます。

「行くぞ、ルナ、カンナ、ティーダ、ヴァン

」「」「」「了解」「

「NO・0ラグナレク行くぞ、ついて来い」

「NO・1ナイトメア、了解です」

「NO・2フェンリル、わかりました」

「NO・3ケルベロス、良いぜ了解だ」

「NO・4ヘイムダル、了解です」

それぞれに専用の機体を預け、今頃エクサランスを奪おうとしているアクセルの所に向かったのだった

「誰ひとり殺させはしない！！」

そう一人リョウは呴いていた

駆け抜けること（後書き）

次回からやつと本編に入れそうです

## 始まつて出撃（前書き）

やつとりウルやアクセルが出てきました、本編にじゅうやつてこヨウ  
を介入せらるか物凄い悩みます

では、お楽しみトモ

## 始まりの出撃

SHDE アクセル&amp;ラウル達

「青龍麟……命中精度と威力はなかなかの者だ。とは言え、俺向  
きの武装ではないがな、」こいつは

まあ、確かにコイツは使いやすいがな。エクサランスは取らせて貰  
おう

「あれは!?

「ソウルゲイン!…

「テスラ研で開発してたつていう特機か!」

「ええ……。あそこは確実に敵の手に落ちたようですね

エクサランスのパイロットは母艦と通信しているのか、……ならば  
今が良いな

「……わて、始めるか。各機、そのまま待機だ

「了解

とつあえず確認だが、しておくか

「エクサランスのパイロット、聞いえていいるな?」

「一。」

「貴様の機体をこちらに渡して貰おう、輸送機に収容されている物も含めて全て、だ」

「だ、誰がDCの残党何かに！」

何か勘違いしているな

「DCの残党だと？ フツ……それで構わんさ。俺が誰であろうと、貴様がすべき事は変わらん、こいつがな」

「何……！？」

さあ、選択肢をやろう

「……選択肢は二つ。エクサランスを渡すか、抗うかだ。交渉の時間はない。大人しく従うのならば、身の安全は保証する。だが、抗うのなら……次はコックピットに当てねばならん」

「くつ……！？」

「いいまでですね、ラウル」

突然の事にラウルと呼ばれた少年は驚く

「ラージ！？」

そして、ラージと呼ばれた青年は冷静に答えた

「彼らの要求を受け入れるしかありませんよ」

「だけどー。」

「冷静になつて下さー。多勢に無勢、しかもフイオナは氣を失つて  
いる……今は全員で生き残る事を考へるべきです。命と機体が無事  
なら、研究を続ける事が出来る……。例え、一からやり直しにな  
つても」

その言葉はラウルにも痛いほどにわかつていた、なので何も言えない

「僕が先方と話をしてみます」

ラージが回線を開きアクセルに意見を述べる

「……先程の言葉、身の安全を保証すると話つゝ話……信じて良いん  
ですね？」

「ふ、殊勝な判断だ

「ああ、俺の信じる戦争に暫つて……なにー？」

「ー? 何だ、この反応はー?」

ラウルの近くで爆発が起きた

「うわあつー!」

「何ー?」

爆発の起きた場所に何かの異業が現れた

「あ、あれは…………！？」

「何だ？起動兵器か…………！？いや、そうは見えん。それより、奴は何処から現れた？」

アクセルが何かを呟いていると、異業が何かを言い始めた

「…………発見…………。利用…………する…………」

呟きが終わるとラウルが乗るエクサランスに何かの力が働いた

「タイムタービンが…………！出力が勝手に！？」

「ラージさん、この反応は！？」

母艦に乗っている女性が驚きながらラージに聞いた

「ミズホ。いや、時流子が漏れている？いや、これは！まさかあの物体が！？」

それを好機と思つたのかラウルが

「！」の出力なら…………いける…………今のうちにフィオナを！

「いい状況判断だ！だが甘いな、こいつが…………！」

それを見越していたアクセルが反撃にでる

「何つ！」

「抗うなと言つたぞ。覺悟は……出來てゐるだらうな」

- 1 -

アクセルが白虎鮫を放つ、フィオナが目覚めラウルを庇おうと前に出よつとしたその時。

「悪いがそれを当たらせる訳にはいかないんだよ、アクセル！！」

SIDE リョウ

悪いがそれを当たらせる訳にはいかないんだよ、アクセル！！

ふう、間に合つたか。フイオナは無事だろうか。

「この近接の大型アーミーナイフ…………お前はあの時の……！」

「ああ、久しぶりだな。隊長殿、失念していたか？俺のあの時の台詞を思い出してみろ……」

「くつ、そういう事だつたか。貴様、何処の所属だ！？」

ふ、やつと名乗れるか

「よくぞ聞いてくれたな、俺達は」

名乗りをあげようとすると次々に残りの機体が現れる

「神々の黄昏。ラグナロクだ、独自のレジスタンスだ。俺は今はR  
OKIとでも名乗つて置こうか」

名乗りをあげるとエクサランスから通信に入る

「誰かは知らないけど助かりました」

「斐オナの声思つていた以上に可愛いな まあ今は驚かせてやるか  
礼はいい、お前に死なれると俺の計画が狂うから助けただけだよ、  
斐オナ」

「！？ 何で私の名前を……」

「その話はまだ後だ斐オナ。さあ、アクセル。大人しく退いては  
くれないか？」

「くつ、貴様には借りがあるのでな。従わせて貰う、退くぞお前ら」

「意外に聞き分けが良いな。よし、後はあの原因を潰す！」

「デュミナス、今回は此処で消えてもうう……行くぞ家族たち」

「…………了解」

「…………何故抗う異世界の住人よいや死人よ」

一応流石はこちらでの創造主と呼ばれただけはあるな、俺が転生者つてのを一発で見破りやがった

「黙れ、お前は俺に出逢った時点で朽ちる運命なんだよ」

「ならば……こちらも……」

発光をし始めたと思うと同時にエクサラランスが襲い掛かってきた

「な、なんで!? 機体が勝手に……」

「くせ、どうしたんだ!?」

「どうか、そうくるかテコミナス

「ルナ、ティーダ、ヴァン。エクサランスを傷つけない様に抑えてくれ

俺の家族達はそれに一言「了解」と言つと素直を行つてくれた

「カンナは援護だ」

「分かった

後は、ミズホとラージに確認しないとな

「おい、聞こえるか? ミズホ、ラージ

「何で私たちの名前を……?」

「もつその前振りは良いから早く聞いてくれ」

「え？ あつ、はいっ」

ダメだ、ミズホちゃんと話が進まん

「ラージ、エクサランス少し壊すが良いか？」

「はいっー？」

「分かった、俺は聞いたからなーー！」

とりあえずは転移に巻き込まれないとな

「お前ら一回引いて戻つて来い、後は俺がやる」

そういうと俺の周りにルナ達が帰つてきた

「これがお兄ちゃんの目的だったの？」

「いや、この次が本当の目的だ。俺が合図をしたら機体に取り付けて置いたワイヤーを全機体に繋げ。わかつたか？」

「わかつたよお兄ちゃん。」

話が伝わった事を確認すると俺はラウルが乗っているエクサランスのフレームからアーチェリント・ヘッドを引きずり出す

「悪いが一旦これで帰還しろ」

「すまない、助かった。それよりフィオナを…！」

「大丈夫だ、必ず助ける」

と言い終える前にフィオナが乗ったエクサラーンスが俺に攻撃を仕掛けってきた

「「めんなさい、とまらないの」

「分かっている。ルナ、今だ。」

「わかったよ、みんな。ワイヤーをラグナレクに絡めて！」

「「「り、了解」」

手足にワイヤーが絡み付く

「絶対に離すな、二度と会えなくなるかも知れないから」

俺は五連チーンガンでデュミナスを撃つた、同時にエクサラーンスが暴走を始めた

「タイムタービンが……！？出力が上がり続ける…！」

「くそ、デュミナス…！？謀つたな…！」

「そり…ば…だ…」

俺はワイヤーを引っ張り家族の乗った機体を近くに寄せせる、ちゃんとエクサラーンスも掴んでいる

「時空間転移！？」

ラージがそう呟いた瞬間に俺達は全員並行世界に飛ばされた  
ただ、ラウル達よりも先に俺達 + フィオナは並行世界に着いていた

これが本当の物語の始まりである

## 始まつての出撃（後書き）

祝、閲覧数50000突破

作者としては物凄い嬉しいです。

ちなみに「ユミナス」とはあの気持ち悪いマシンです

ではこれからもよろしくお願いします 三（—）三

漂流場所で……（前書き）

投稿ペースを上げなければ（。 。 ； ）

SHDE リョウ

「あ、うん? いてえ、あたたた。つか無事に着いたか?」

周つを見渡すと、ちゃんと全機確認出来て一安心だ

それより今は時代と場所の確認の為にパソコンを……

「ラグナレク、ハッキングするからサポートよろしく」

「了解致しました、サポート開始」

え~と、アクセスポイントの確認……完了

データの読み込み開始……ブロックが以前の形式よりも劣化しているな、これなら前の応用で……よし、完了

ロビーは出来ないから……う~ん、よし。直接ラグナレクに転送、これなら危険はないな。よし、全工程完了。

原作の一年前か、多少はゆっくり出来るな。それよりみんなに通信しないとな

「おこ、お前等起きた。着いたぞ

「う、う~ん。気持ち悪いよ~お兄ちゃん~へへ

ルナは起きてるみたいだな、後の三人とフィオナはまだ気がつかないか

「」苦勞様、ルナ。一旦俺は隠れ家があるか捜して来るからここ一帯にステルスを頼む」

「う、うん。了解したよお兄ちゃん」

「後でしっかりと休んで良いからな」

俺はそう言つと前の世界に隠れ家があつた場所に向かう

確か神様が言つにあれば一種の別次元だといつ」と、つまり並行世界にも理論的には存在するはずだ

少年移動中)

「着いたか」

「マスター、此処は……隠れ家ですか?」

「ああ、間違いない。」

そこにあつたのは世界から空間が切り離されている場所

「たぶんだが此処は俺達が家族又は友人と認めた奴にしか感知出来ない」

「?」

「悪い、わかりにくいか。えーとだな、つまり此処の世界の主は俺つて事だ……一応な」

「ひつやうひの場所はまだ生きている、帰ってきたぞ我が家に。」

「確認も済んだし戻るぞ」

「了解ですマスター」

少年移動中

俺が家族達のもとに戻ると、何故か子供たちとフィオナが話をして盛り上がっていた

「お~い、今帰つたぞ。何の話をしてたんだ?」

何故かみんな口を揃えて『秘密』と言われた、お兄ちゃんちょっとショックだよ

「まあ、それは置いといて。報告が一つある、良い事と悪い事どっちから聞きたい?」

「じゃあ良い事からがいいな」

ルナが子供達を代表して言ひ、フイオナはと黙つてこいつを見ていた。

少し気になるなあ、よし。先に話でもしておくかな

「じゃあ報告は血ひ紹介の後にするかな。たぶんこいつらからはも

「うまれてるんだろ?」

「ほこ、良い子供たちですね」

「おーおー、そんなに堅くならないでくれよ。いつまで堅苦しくなつまつ、俺はリョウ、こいつらの家族だ。よろしくな」

「リョウ? 貴方は確かROKUと?」

「それは俺達のレジスタンス名のリーダーとしての名前だよ。俺はこの世界を……それはさておきフイオナは敬語禁止な、俺とたいして歳変わんねーんだから。いいか?」

「うん、わかったわ。リョウ、それで報告つて?」

やつと本題に入れたか……って言つても俺が話を代えたんだけどさ出来る事だ」「

「ふうん。で、悪いことって何なんだよ?」

良い質問だよティーダ

「それはだな、並行世界に飛んだ事による記憶の弊害と俺が知る歴史から外れる事だ」

ちなみに前者は俺には当て嵌まらない、後者は別にどうとでもなるから気になりはしていないが、子供たちとしては心配だらうな

「ちよとまつてー・リョウ、貴方が知る歴史つて一体なに？」

「仕方ないな、話してやるよ…………と言いたいが今は隠れ家に帰る  
としようか、家族たちよ」

「この言い方かっこよくな? おい、ちよ、そこ石投げないでー?」

そして隠れ家に到着した

「おい、ティーダ。家に帰つてきたならただいまだろ?」  
「ちよ、ただいま……」

「おひ、お帰り。まあ、今日はフイオナの歓迎会を開くぞ~」

当の本人は全く状況を理解していなかった

「つ?つ?つ?」

「ルナとカンナはフイオナと着替えて来なさい、ティーダとヴィアン  
は俺んとこに来てくれ」

「「わかった(わ)よ~」」

「了解した」

「…………うん」

そして今、オペレーションルームにて一人に詳しく今の状況を話している

「俺の目的はやっとスタート地点に着いた、今の成果はフィオナが死ななかつた事。俺がもといた世界ではフィオナは死んだがこの世界では助ける事が出来た、一人ともありがとうな」

「ああ、それは分かつたけどよ、何で俺達だけなんだ？ルナとカンナ、後は本人に教えてやれよ」

相変わらず痛いとこを突くな

「先に伝えておく事で多少なりとも混乱を防げるし、何よりお前ら一人の方が頭いいしな…………ははは…………はあ」

「悪かつたよアーニキ、まあ、それに関しては納得だけじよ

「納得した」

此処で納得して貰わないと俺の計画に支障をきたすからなあ

気がつくと、どうやら結構な時間を話していたようだ

部屋に戻ると三人は私服に着替え終わっていた

「お兄ちゃん、これ似合つてるかな～？」

ルナがくるくると回りながら（誤字にあらず）着ている服を見せる

くいくいつ、いつの間にか隣にはカンナがいて袖を引っ張りながら聞いてきた

「可愛」?

「うん、どちらも可愛こし似合つてゐるよ」

心からやつと思ひながら言つてやる

俺（作者）は口っこ（です）じゃねえ!!

今、変な電波が流れた氣がするけど話を進めよ。肝心のフイオナはノリについて行けずに「ほけ」っとしている

「え~と、一人も椅子に座つてくれ。フイオナはそこに座つてくれ

フイオナに赤い俺が使つていた椅子を渡す

「ありがと」

「いやいや、それでだ。聞きたい事があるなら聞いてくれ、俺はそれに答える義務があるからな」

まあ、もとからこいつする予定だつたし。家族が増えたのは良い意味で計算外だつたしな

「え~とじやあ、あなたたちは誰?名前とかそつこうのじゃなくてだよ」

「それに対する答えはだな、簡単に言えば歴史を知るもの。だけどそれは俺だけだ。こいつらは俺が拾つただけ、これでいいか?」

「うん、次は此処はどこなの?」

「此処は俺達の隠れ家兼基地、で、聞きたいと思われる方の答えは  
並行世界」

「並行世界？極めて近く、限りなく遠い世界のこと？」

「ふむ、この世界での並行世界の概念はそれで決まりだな

「そうだよ、俺達は君が乗るエクサランスの暴走で此処に来たんだ。」

」

「えつー!？」

「フィオナはショックを受けたのか俯く

「そんなに落ち込まれると心苦しいから先に言つたけど、望んで俺達はこひつに来た。だからフィオナが落ち込む事はないよ」

「それでも私は…………」

「仕方ない、フィオナにも俺の事を教えてやるかな

「仕方ない…………な。本来なら家族になつてから教えていたんだけどな、特別に話してやるからけやんと聞いてくれよ?これは全て俺が知る歴史だ」

「フィオナは無言で頷くと顔を上げてくれた

「まず始めはフィオナ、君についてだが。本来なら君はアクセルか

ララウルを庇つて死んでいた、これについては歴史を知る第三者が介入して解決出来た。次に俺の事だけど、俺は転生者。俺は生前はこの世界を観測する場所にいた存在だ、信じられないと思われるがすべて真実だ」

「私は……死んでいた? 転生者? 観測する者? 意味がわからないわ……」

「証拠を見せると云われても今は見せてあげられない、契約するか?」

「契約?」

「ああ、俺達の新しい家族になるといつ契約だ」

契約と言つには曖昧過ぎて信用性にかけるが俺はこれを望んでいた  
「ええ、わかつたわ。私はあなたたちと家族になる。よろしくね、みんな」

こうして時空間転移をした日は何とか終わりを迎えた

「ああ、じちじや。そしてよつじや、我が家に」

口説く（煽情化）

器説で、つまらないこと話すのが読んでもうてられ

口算？

俺の一日について今回は説明しうつ、だいたいの日常では今から説明をする様な生活を送っている

朝

俺の朝は早い、なぜなら

「お兄ひめ……うひめうひめ、むにゅ～

トガツ、俺の頭があつた場所にルナの踵が落ちていた

「へいっ！？あ、あぶねえ…………またルナは俺のベットに転がつて来たのか。しかも服がはだけてゐる」

危険を感じ紙一重でルナの踵をほぼ毎日避けている。それと同じように毎回ルナの服をちゃんと戻したり布団をかけ直したりもしている。

「うへん、もう朝か。さて、朝ごはん作らないとな

最近は台所に向かうと人に会うようになつていて

「ん、おはようコヨウ」

「うそ、おはようソイオナ。朝は俺が作るつて言つたんだけどなあ……俺の料理つてそんなにまずいかなあ？」

最近はいつも俺が作ると言つて いるのになあ

「ち、違つよ。わうじょなくて……わう、私は朝早いからちよつと暇なの————————————

「ん、 そうなのか。 よかつた。 あとフィオナ、 顔が赤いぞ？ 風邪でも引いたのか？」

「そんなことないよー！それより早く朝ごはんひくわい、ね？」

「じゃあ作戻りかリケーストはある?」

献立決めるのって結構面倒なんだよね

一  
じや、  
私は洋風が良しわ

「わかつた、じやあパンとサラダと紅茶で良いかな。フイオナはテレビ拭いてくれないか？あと時間になつたら子供達を起こしてくれな」

「うん、了解」

フィオナはそう言つとテーブル拭きをもつて部屋を移動した

少年料理中

「お、みんな起きたのか。ほら顔洗つて来なさい！」

頭をこくこくと揺らしながら眠そうに洗面所に向かった四人を見ながら作つた料理をテーブルに運ぶ

「ありがとフイオナ、俺一人だと結構大変だつたんだよ

「いえ、大丈夫。私子供好きだから」

そんな会話をしていると顔を洗い終わつた子供達が戻つて来ていた

「お兄ちゃん、なんか楽しそうだね」

「ん、そつか? アニキはいつもあんな感じじゃないか~」

ルナとティーダは何かを話しながら席につく

「……(＼＼＼＼＼)」

「おはよう兄ちゃん、フイオナさん」

カンナとヴァンはいつもどうりだ、しかしだな

「カンナ、もう少し会話をするのを慣れよつな、ヴァンもだぞ」

そう言つて俺はカンナとヴァンの頭を撫でる

「つか、カンナとヴァンばつかりすることよ~」

「まあ、ルナはしつかりしてゐから助かつてゐるだけどなあ。やつぱりティーダだけか」

ティーダに助けを求めて視線を送るが……

「あん？俺は飯食うのに忙しいんだ、自分で何とかしてくれアーチキ」

「あ、ティーダ。ドレッシング取つてくれる？」

「ああ、フイオナまで……」

「まあ、早く朝ごはんべような」

「うん、いただきま～す

「……（じべつ）」

「いただきま～す」

「ううして忙しい朝は終わる

お昼

昼までの間はほぼ研究室に籠っている、今はエクサランスのパーティを設計している

「フェアリーを地上でも使えるようにするにはエネルギーの変換と重力緩和のシステムが必要になるな」

既にラグナレクの整備が終わり、追加装甲をナイトメアに取り付け、残るケルベロスとフェンリルはパーティの開発中で戦力的には何も問題は無いのでエクサランスの改造に勤めている訳だ

「いや、フェアリーにジャマーシステムを付けての攻撃もいいな。

よし、再現開始

俺は紙とペンを取る、ここで神様から貰つた能力『技能模倣』を使う『技能模倣』は俺の知る知識の中の人物の能力を自分の物として扱う事が出来る。ここで模倣した人物は某魔法先生の生徒のバルと呼ばれる少女

時間にして約一分で設計図は完成した

「後は理論と理屈を固めないとな。先にパソコンにスキヤンしないとな」

カタカタカタカタカタカタ

「スキヤン完了、次は更に設計図の穴を埋めないとな」

引き出しから一つのUSBメモリを取り出す

『開発用ナノマシン・武器設計専用』

「見取り図の立体化開始、理論と理屈の補強、高層理論を再現」

『終了まで後一時間です』

「これからはナノマシンが勝手に終わらせてくれるから暇になるな

「訓練でもするかな…………」

少年移動中

訓練室のランプが使用中になっていた

「こんな時間に誰だろ?」

扉を開けた先にはティーダが刀を振っている姿があった

「ふう、何だアニキか。ここ使うのか?」

「ああ、ちょっと鍛練でもしようかとな

俺も壁に掛かった愛刀を手に取った

「アニキそれは?」

「これが?これは俺の愛刀の獅子刀・傀儡だ。シシトウ・カイライ その辺の兵器よりよ  
つほど良く切れるな」

鞘から獅子刀・傀儡を抜く

俺のスタイルは居合からの神速、模倣を使わないで Fateのアサ  
シンを完璧に超した

「アニキ、俺と手合わせてくれーーー!」

ティーダが手を合わせて俺に頼んできた

「仕方ないな…………一本だけだぞ」

「おうつーーー!」

試合をするために真っ直ぐに向き合つ

「行くぜー！」

ティーダは下段に刀を構えて走つてくる

「うつりやああーーー！」

首を撥ねる「ースにやや斜め下から切り掛かつてきた

隙が大きいな……流れ柳

それを力を一切かけずに刃を滑らせて流す

「終わりだ……枝垂れ桜！」

鞘から一気に抜き放ち首の前で止める

「ま、負けた…………くそつ、アニキ強すぎだ」

「お前も筋が良いからすぐに強くなれるや、じやあ俺は戻るから」

「ああ、わかった。じや あなアニキ」

「うして昼は終わり夜がくる

夜

「…………（くいくい）」

夜になるとカンナの活動が活発になる

「あそぼ？」

「何で疑問形なんだ？」

「亡じいと迷惑かけるもん

ああ、気を使つてるのか。いい子だなあ

「いいよ、今は暇だから向して遊ぼうか？」

「一緒に本読むの」

俺に『北欧神話』と書かれた一冊の本を渡して来た

「北欧神話か、これだったら聞いてくれたら俺が教えてあげたのに  
な

小さく俺は笑つてカシナに

「じやあじゅうお兄ちゃんに話して欲しいな

「うそ、いよいよから聞きたい？」

カシナはてくてくと歩いて俺の足の上に座つた

「じやあフンリルについて教えて」

俺はカシナの頭をよしよしと撫でながら話を始めた

「フェンリルってのは邪神ロキと巨人族のアングルボダから生まれた三匹の魔物のうちの一匹なんだ」

「うん、それで？」

「そのフェンリルは上顎は天に届くほど大きな口を持つ巨大な狼でどんな鎖にも縛られなかつたんだ、けど大神オーディンは小人族に頼んで世界に無いもので鎖を作つて貰つたんだ」

「世界に無いもの？」

「ああ、それは山の根、女の髪、鳥の唾液、猫の足音、魚の息で作った魔法の紐グレイプールでフェンリルは拘束されたんだ」

「その後はどうなつたの？」

「この娘は優しいから自分達に当て嵌めてしまつてるんだろうな

「大丈夫、話しには続きがあるから。フェンリルはその後しばらく岩に繋がれていたけどラグナロクの時に解放されて自由になりました。これでフェンリルのお話は終わり」

カンナは「口」しながら俺に言つた

「お兄ちゃんが私達を助けてくれたみたいだね」

「だけど俺はそれに上手く答える事は出来なかつた

「俺はたださ…………いや、なんでもない。カンナ、もう遅いから寝

ようか？」

「うん」

俺はそのままカンナを抱き上げ部屋に連れていった

「お休み、カンナ」

「うん」

カンナが寝付くのを待って俺は部屋を出た

「さて、俺も寝る……かな！？」

俺の視界に裸のフィオナが映った

「あつ！／＼／＼／＼」

「わ、悪い。てか、何で裸で歩いてるんだ！？」

「ち、違う！下着を忘れて服を持つてくるのわすれて／＼／＼／＼」

フィオナは真っ赤になり俺を見てくる

「ぐ、仕方ない。俺の服貸してやるから早く着る」

俺は上着を脱いでフィオナに渡す

「あ、ありがと／＼／＼／＼」

「次からは『氣』をつけてくれよ」

俺は逃げるよ」机に向かって立ち去った

「ココで裸見られちゃった……」

その口ファイオナはベットの中で悶絶していたようだった

自室

やばい、ファイオナが異常に可憐い。あんなキャラだったっけ？

「ん~お兄ちゃんどうしたの?..」

「ぬ、ルナ。なんでもないから」

やべ、すぐえどもつてる

「ふ~ん、まあいいか。お休み、お兄ちゃん」

「あ、ああ。お休み、ルナ」

ルナが寝たのを見てパソコンで完成した設計図を見よとしたが

「ふあ~、ねみい。ねよ」

俺は電源をきつてベットに入った。

「今日も『』して、口だつたなあ」

田常は結構面白い、ヴァン少年はどこで呟いていた

せりじて選択は運命を観察に変へる（漫書也）

やつと更新出来ましたが短いです

時として選択は運命を劇的に変える

あの日常生活はあつといつ間に終わってしまった。

楽しい時間が多かったふんそれに比例して開発や訓練も真面目になってきた

「俺達はこれからDCの残党の殲滅を開始する。フォーメーションはヴァルハラだ」

この一年はいわばこれから始まる激戦に備えての休暇であった

そしてフィオナのエクサランスのフレームを完璧に仕上げフェアリーも地上で使える様になった

「しばらくはここに戻つて来ないから必要な物をちゃんと考えてこい。それで神々の黄昏のミーティングを終わる」

「解」[「」「」「」「」]

「わかつたわ」

「それじゃ各自準備が終わりしだい格納庫に集合な」

最後はいつもの様にいい解散した

「じゃあ俺はここのままラグナレクに乗るかな」

俺は最初からラグナレクに必要なモノを積んでいる為に準備は必要無い

「う、う、ぐす、お兄ちゃん~!~」

ルナが涙目でぐずりながら俺の服の袖を引っ張る

「お、と、どうしたんだルナ?」

「私の革手袋がないの~」

おお、そりや大変だ。ルナはあれが無いと操縦テクが少し落ちるからな

「仕方ないなあ、俺のスペアでいいなら貸してあげるから

「う、う、ぐす、ありがとお兄ちゃん。ひっく、う」

こりゃ新しいの買に行く行くしかないな

ルナにスペアの革手袋を渡してラグナレクに戻り立つと今度はカンナとティーダが来た

「兄貴、一応対人用武器は持つた方がいいのか?」

「あと……食べ物とかはどうすればいいの?」

あ、言ひ忘れてた

「え~と、ティーダとカンナの質問だけ。最低限に自分を守る為の武器は持つよろに、食料は心配しなくても大丈夫だよ。ティーダ

は武器について他のみんなに伝えてくれ

「わかった、りょーかい」

「うん、わかった」

今度は入れ違いでヴァンとフィオナが来た

「兄さん、フィオナのエクサランスについて何ですが、少し弄つても大丈夫ですか？」

「ん、エクサランスに何か問題でもあったのか？」

「いや、私には少し反動がきつくてね。ヴァンに重力緩和のシステムを弄つてもらいたいんだ」

フィオナが追つて説明をする

「ああ、別に構わないよ。あとヴァン、ヘイムダルの方は大丈夫か？」

「特に問題はないですよ、では少し行つてきますね」

「そうして待つ」と一時間、やっと全ての準備が完了した

「それじゃ行くぞーー！ノーノーラグナレク出る」

「わかったよーー！ノーナイトメア出るよーー！」

「わかった……ノーノーフンリル出ます」

「N.O.・3ケルベロス、了解だぜ」

「N.O.・4ヘイムダル、了解です」

「エクサランス、大丈夫行けるよ！」

そして俺達はDCの殲滅に向かつた

今の俺達は相手には見えていない。いや、正確にはレーダーに反応していない

「ルナ以外はステルスモードをアウト、これより殲滅を開始する」

「「「「了解」」」

そして戦場に俺達『神々の黄昏』のこちらの世界で初めての歴史への介入が始まつた

陣形はヴァルハラ、形としては俺が敵陣に突っ込み近距離からの殲滅

そして、ステルスを巧みに使って敵陣の後ろからルナのナイトメアが

横つ腹をヴァンのヘイムダルが強襲してルナと二人で十字放火が敵を殲滅する

そして逃げようとする敵をティーダがケルベロスで殲滅

フィオナのHクサラランスは地上で使える様になつたフェアリーで援護射撃

おおむそ80近くいた敵機をコックピットに傷をつけない様に無力化していく

これは最早殲滅ではなく蹂躪、この世には本来有り得ない技術は脅威ではなく恐怖

使い方を一歩間違えるだけで一瞬で相手を蒸発させる兵器

「よし、これで今日は終わりだ。戻るぞ」

実際は敵基地に着くまで300以上の機体を無力化してきた。田にちにして約一週間、俺達は精神を擦り減らしながら戦つた

「兄貴は何で破壊させないでコックピットを残せらるんだ?」

ティーダが不思議そうに聞いてきた

「お前達に人殺しになるのは早い…………まあ、命を軽く見ないで欲しいだけだ」

「お兄ちゃん…………嘘ついてない?」

今度はカンナか

「ああ、嘘じゃない」

「…………やつ」

「でも遅かれ早かれ死には慣れないといけない。それをたたかれてるだけだよ、宇宙に行けばこの数なんて比にならないくらいだしな」

「でも大丈夫だよお兄ちゃん、家族が私達にはいるもん」

「そうだなルナ、ヴァンは……特に無いようだな」

「うん」

「リコウも信用されてるのね」

「フィオナが小さく呟いたが俺には聞こえてはいなかった

そうして一週間に渡る俺達の殲滅戦は成功に終わったのだった

## 突然過れる出会い（前書き）

久しぶりの投稿で内容がめちゃくちゃですが飽きずに読んでいただければ嬉しいです

## 突然過れる出合

俺達は殲滅を終えて隠れ家に帰る途中だつた

「お兄ちゃん、何か反応があるよ?」

と、ルナが俺に言つてきた

「まだ、残つて……違つ、テスラ研だ」

「テスラ研つて兄貴の目的地の一つじゃなかつたか?」

「ああ、仕方ない。今からテスラ研に向かう

「はあ、またなんですか?」

と、ヴァンが聞いてくる

「困つてゐる奴らを見逃す訳には行かないだろ?」

つてのは建前で、実際連邦の奴らに恩を売つておくれとも悪くないからな

「リョウが黒い……」

「気にしたらダメですよ、お兄ちゃんほんな感じになつてもお兄ちゃんですか?」

カンナ、多分説明になつてないよ、それ

「まあ、冗談はさておき本音を言つとだな。俺の計画の為だ」

「それが一番わかりやすいね」

「わうだな、それだつたら俺達は兄貴についてくしか無いし」

「ティーダ、それじゃお兄ちゃんが無理矢理私たちを使つてるみたいじゃないの?」

「ああ、悪い。そういう意味じゃないんだよカンナ」

「まあ、こつもの事だからそろそろ行こうが」

と、声をかけると

「「「「」「」解」「」「」」

「これから俺達は本格的に歴史を変える……ついて来てくれ

俺達はテスラ研に向かつて移動を始めた

「ロレンツォ中佐、ランカスター隊が全滅しました」

所属不明の兵が告げる

「何……? 敵は三機だつたはずだ。倍以上の数を回してその結果か  
?」

ロレンソと呼ばれる男は今だ疑つた様に聞く

「は、はい。これが敵機の映像です」

モニターに映像が流れた

「ヒュックバイン…………それに、ゲシュペンストのカスタム機が一  
体。一機はデータと色が違うようだが…………ATXチームだろうな、  
これは」

モニターを見て納得したように言つ

「や、やはり」

「場所が場所だ、予測はしていた。奴を呼んでおいて正解だつたな」

「…………」

「……人質は？」

「所定の位置へ移動済みです」

「タイプCF起動までの時間は？」

「あと20分ほどです」

「広範囲ASSRSの取り付け作業はどつか？」

「起動までは間に合つたのです」

「上手く使えるのだろ? な?」

「そこからもじばりへ会話を続き

「了解した。ムラタを呼び出せ」

「はは」

兵が通信をとる

「何だ、中佐?」

「ランカスター隊が全滅した。敵はATXチーム……お前向けの相手だ」

ムラタと呼ばれる男は興味深そうに呟く

「ひひ」

「そしてそこにはATXチームが着いたようだ

「動かんか。何かを待つている様にも見えるが気に入らんな

「確かにね。余裕しきしきつて感じよねえ。逃走ルートはもう確保済み……とか?」

「クスハ達の件もある。じの道、俺達も下手に動けん。その場で待機。油断するなよ?」

「了解、せめて状況がわかれねえ」

「ん？ あれは…… カメラ望遠」

ブリットが何かを見つけだした

「く、クスハ！ クスハがあそこにいます！ ！」

「へー？ そんなに都合良くなー？」

エクセレンが驚きながら返事を返す

「座標転送します」

「…………、キヨウスケ～、クスハちゃん達の状況確認～！」

エクセレンが少しふざけて言つと

「…………見ればわかる。人質にされているらしいな

と、冷静に返された

しかし、ブリットはクスハが捕まつている事もあり冷静では居られなかつた

「今なら人質と反抗グループを分断出来ますー！」

「ちょい、ブリット君待つて！」

「いづいう状況を開する為に来たんでしょう、自分達はっ……」

といつてブリットは一人突っ込んで行く

「突貫して来たか」

敵のムラタは状況を冷静に判断している

「一、あのガーリオンの剣は……シシオウブレードか！？」

見覚えのある剣にブリットは動搖する

「俺が相手してやる」

「くっ、そこをどけええええ！」

ブリットは叫びながらツツツツヤクラムで襲い掛かる

しかし

「青」「オガ、隙だらけだ。もうつた！！」

「ぐわあああ……」

一線を喰らつてしまつた

「ぶ、ブリット君……」

エクセレンが心配をして声をかけると

「ふん。ATXチーム……あのゼンガー・ゾンボルトに鍛えられた

連中だと聞いていたのだがな…………な、新しい反応だと？」

その声が聞こえた途端に静寂に包まれた

「我等は神々の黄昏、ラグラロクだ。今すぐどちらも武装解除してもらひ！」

「誰だ！？」

今まで冷静を保ってきたキョウスケだったがさすがに焦っているようだ

「神々の黄昏だと？ふん、あの噂の謎の組織か」

「どうやらムラタは何かを知っているようだ

「我々の噂を知つてなお挑むか、そちらは知らなによつだから今日はそちらに着くとしよう！」

その宣言と同時に五機の機体が姿を現した

「ステルス！？」

「そう、警戒するな。今回は味方になると誓つただろ？」「

S H D E 神々の黄昏

俺はまだカラーを赤に戻していないアルトイゼンに乗ったキョウ

「そう、警戒するな。今回は味方になると誓つただろ？」

93

## スケに言つ

「信用出来んな、何故俺達に協力する?」

「こちらにも事情があるんだ、それに勘違いとはいえ来てしまった以上は手伝い位はしよう」

そう、テスラ研で何かが起きたと思い、来たら全然違う場所で戦いが起きていたのだ

しかし、結果は問題なかつた。キヨウスケ達に恩を売るといつ目的はどうやら達成出来そうだ

「それと、信用できないならしなくてもいい。ただのボランティアなんだから。ナイトメア、周りのガーリオンを落とせ」

「了解、ナイトメア行くよ」

「なつ、迂闊に行けばブリットの一の舞に!?」

ナイトメアはいきなり姿を消しレーダーに反応を消した

そして、一瞬で周りを飛んでいたガーリオンが爆碎した

「任務完了、戻るね」

「ついでに人質も確保して来てくれ」

「了解」

「なんて機体だ」

「私のヴァイスちゃんより速いーー？」

「どうだ、まだやるか？」

俺はムラタの機体に話しかける

「噂に違わぬ強さ、今回は分が悪い様だ」

「じゃあ退いてくれるのか？」

「ふん、逃げなど戦い終わってからで十分だ」

「そうか、悪いがこれが俺のやり方なんですね。恨むなら恨んでくれてもかまわない」

ラグナレクで一気に詰め寄り反撃の時間を『えないまま』瞬で腕を刎ね落とす

「一つの間にーーー」

「これで終わりだ」

コックピットを残して破壊しようとしたとき研究所からタイプC・ヴァルシオン改が出てきた

「まで、それ以上のことをするなうちらも人質を殺すことになる」

「へへ、ロレンツォ中佐か。条件を出せ」

「こちらは後逃げるだけだ、よつてこの場から逃げさせてくれ」

「分かった、その代わり人質を一人でも殺そうモノならば我々が始末する。」

「了解した」

俺たちは何とか始まりの出会いを終えたのだった

## 突然過れる出会い（後書き）

すいませんでした。長い間書けずにいたのですが今回も内容が意味  
が分からぬ方が多い気がしてなりません

次回はもう少し不甘ばつて書きたいです

意味（前書き）

本編からまた少し離れました

## 意味

「帰るぞ、ステルスマードに移行しておけ

何事も無かつたかのよつに俺は家族（仲間）に告げる

「まで……」

その声に俺は言葉を返すことはしなかつた

「何故俺たちを助けた！！」

「誰かを助けることに理由は要らないだろ？」

口が勝手に動いてしまったがそのままラグナレクをステルスマードに移行しその場を後にした

「なあ、アニキ？」

「なんだ、ティーダ。何かあつたか？」

ATXチームから離れた所で通信が入った

「アニキは誰かを助けるのに理由はいらないって言つたよな？」

「そうだっけか？まあ、そういう話は家に帰つてからじよつか

「あ、ああ。わかつたよアニキ」

～少年少女移動中～

隠れ家に帰つてきて早速結果を報告、そして今に至る

「それで今回の作戦の結果だが、上出来だな。本当ならまたすぐに活動する予定だったがしばらくは身を隠すため単独任務が増えるからみんなはしばらくお休みだ。以上、これでミーティング終わり。」

ミーティングが終わりそれぞれが自分の部屋に帰る中俺とティーダだけはそのまま残つていた

「アニキ、いいか？」

「別にいいよ、それでティーダは何が聞きたいんだ？」

「アニキのあの言葉つてよ、俺たちひとつてはや、本当に嬉しかったんだ。それでさ、なんとなくだけどよお礼が言いたくなつてさ。本当にありがとアーニキ、俺たちを助けた上に家族として迎えてくれたこと」

その言葉を聞いて俺は再び固く誓つのだつた。絶対に家族は守りきつて見せると

「せうか？俺ことひづけや当たり前すざることなんだけどな。それに勘違いすんなよ。俺は初めからお前らの家族じやないか」

「はは、そうだよな。アーチー、これからも俺はアーチーにっこりしていくから置いてかないでくれよ?」

「当たり前だ、おいてくなんて絶対ない。お前らが追いつくまで俺は待つから」

「うううとティーダはバツが悪そうに頭をかいて

「うううと訓練してくれる」

と黙つて走つていった。さあ、俺も部屋に戻らうかな

部屋に戻るトルナとカンナが俺に抱きついてきた

「まで!? いきなりビーブ! ってかルナは分かるけどカンナまでどうしたんだ!?」

「うう、お兄ちゃん私のことそんな風に思つてたんだ! !」

「……疲れた」

ルナは抱きついたまま俺をぽかぽかと叩き、カンナはそのまま寝てしまつた

「ははは、冗談だ。痛いからやめてくれよ」

「眠つたカンナを抱き上げそのままベットまで歩く

「あ、カンナばっかりするいよ。ルナも抱っこして」

「うーん…危ないだろ? ちゃんとルナにもじつめんなうの」とルナも俺の胸にダイブしてきた

「うお…危ないだろ? ちゃんとルナにもじつめんなうの」とルナも俺の胸にダイブしてきた  
「えへへ~」

そんな顔を見てると不思議と怒る気はしなくなつた

「はーはー、じゃあ少しだれ?」

「うさ」

一人を抱きなおしてベットまで運んだ

「ねえ、お兄ちゃん?」

「なんだ? 他に何かあるのかい?」

「うーん、ただね。ありがとうって言いたくてね」

今田は何か田から汗が出てやうにならぬ。こんなことなら家族には危険なことをさせなければよかつたと思った。けど、これは家族の総意だったから仕方なかつたんだけじゃ

「やつか? 俺はその言葉だけで嬉しこよ」

「うさ、お休みお兄ちゃん?」

「ああ、お休みルナ」

「一人がベットで寝ているのを少し見てからキッチンに向かうとヴァンとフイオナが料理をしていた。ヴァンって料理できたっけか？」

「あ、リョウ兄さん」

「リョウどうしたの？」

「どうしたも何もないは俺がいつも料理をしている所じゃなかつたかな？」

「ちよつと料理をしに来たんだけじゃ」

「ああ、ちよつと待つててね。すぐに終わるから」

「手伝おつか？」

「いいえ、リョウ兄さんは座つててください」

「そういって俺を、ヴァンが椅子に座らせた

「今日は何もしないで座つても僕達が家事をしますから大丈夫です。」

「そうよ、リョウは休んでもいいよ

いや、逆に向もしないと。何か申し訳なくてや

「それじゃなくてもリョウ兄さんは僕たち以外にも背負つているモノが多いんですから」

「ああ、俺も鈍いなあ。」こいつらは俺を心配してんのか

「ああ、わかったよ。今日は大人しくしてるよ」

「そうね、最近は一人で何でもしようとしてるの見てたけど結構心配だったのよ」

「そりや悪いな、フイオナ。もう少し身体も氣を使うとするよ」

「そういって会話を終えるとヴァンが料理を持ってきた

「出来ました、リョウ兄さんの料理には劣るかも知れませんがなかなかの出来ですよ」

出された料理は洋食。フレンチトーストに生クリーム、コーンスープにサラダ。組み合わせはそもそもよくはないが味は良かつた

「美味しかったよ」

ただ一言、心から思つたことを述べた

二人は食器をキッチンに満足げに運んで行つた

俺は椅子から立ち上がりオペレーション室に向かう。目的はこれらの中の予定を決めるために

パソコンのスイッチを押して起動を開始する

パスワードは初期設定から変えて、すぐに打ち込めるモノにした

「さあ、俺の知る限りはこれからが大変になるんだよなあ」

そう言いながらも目的を果たすために指を動かす

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ  
カタ

画面に映る情報を頭でまとめて資料を作成する

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ

そこに出来上がったのは一つの資料本、内容は今までの連邦の裏側  
つまり、隠蔽されてきた真実。これは俺達の最終兵器だ、血を流さ  
ないで平和に物事を進展させるための

「だいたいこんなもんだよなあ」

腕を組み頭の上に上げて身体を伸ばす

背骨が心地好くポキポキとなつた

「家族だけは守る、この力はそのために貰つたつて事かなあ」

あの時はただ楽しそうだったから

今は違う。実際に触れ、感じ、愛し、感情がこの世界で生まれた。  
だからこの力は大切な家族を守る為に使つ

例え俺が死ぬ」となつても

「さあ、仕事も終わつたし寝るかな?」

まあ、俺が死んだら悲しんでくれるよな?

今はその時が来るまで『今』を楽しむとするかな

この限りある『有限』である時間をさ

閑話／家族との買い物（前書き）

再びオリジナルストーリーへと戻ってしまいました。

なかなかゲームを進める時間がなく、オリジナルストーリーが続き  
そうなので、本編は12月の冬休みからに進める予定ですので理  
解いただきたいです

あの突然なる出会いから数日が過ぎ、家族で平和に過ごしていた隠れ家の冷蔵庫は底をぬきかけていた

「朝ご飯の分はぎりぎり残ってるけど毎日は無理ですね。どうしますか兄さん？」

ヴァンが少し悩みながら俺に聞いてきた

「あ～、じゃあさ。今日はみんなで買い物に行こつか。ちょうどいい機会だしさ」

そつだ、たまには戦いなんて忘れて遊ばないとダメだよな

「いい機会ですか、わかりました。僕はティーダとフィオナに伝えときますから兄さんはルナとカンナに教えておいてください」

「じゃあ、10時迄には着替えて生活区のロビーに集合な

「わかりました、それでは伝えてきますね」

そう言ってヴァンは冷蔵庫を閉じてフィオナとティーダを呼びにいった。

さて俺もルナとカンナに教えに行く為にルナのいる自室に向かった。扉を開けて中に入るといつもの如く毛布やら服やらがはだけた状態で寝ているルナがいまだに眠っていた

「おーい、ルナ起きてるか？」

ふにふにとほっぺをつつきながらルナに聞くと

「ふにやうあ？すーすー」

と、気持ちよさそうに寝ているのがわかつた。この様子だとまだ起きそうにはないなあ、先にカンナから教えるか

俺はただけたいろいろなものを元に戻しカンナの部屋に向かつた

カソナの部屋の扉を開けるとベットの周りに散らかつた本が目に入つた

「はあ、また本を読んでそのまま寝たのか」

俺は咳きながらも本を拾い本棚に戻していく、その合間にカンナの顔を見たりしていたら

(やつぱり子供ってかわいいよなあ。今の俺は限りなく幸福だよ)

なんて思っていた。最後の本を棚に入れてルナ同様ほっぺをふにふにとつつきながら

「カンナ、起きてるか？」

「すーすー…………ふにゅ？お兄ちゃん？」

「お、起きたか。今日は家族みんなで買い物に行くから十時までに生活区のロビーに集合な。つて、また寝てるー?」

「おひるひ、お兄ちゃん~」

まだ寝ぼけているのかカンナは俺の腕に抱きつきながらうつむいていた

「はは、しかたないなあ。カンナ、朝だぞ~」

ペラペラと舌を軽く叩くとカンナが完全に起きたようだ

「あ、お兄ちゃん……ふあ、おはよう」

「ああ、おはようカンナ。わたくしの話覚えてるかい?」

「え、お兄ちゃん私に何か言つてましたか?」

やつぱり寝てたのかあ。まあ、カンナの寝起きも見れたしこんな  
「うん、今日は家族みんなで買い物に行くから生活区のロビーに集  
合つて教えにきたんだ」

「買い物……お兄ちゃんねつとまつてて、今着替えるから」

そういうとカンナはクローゼットから私服を取り出して着替え始めた

「カンナ、俺は家族だからいいけど」

「?」

「ううしたのかとこう顔でこいつを見とまつてくれた

「他の人がいるときはせりやんと出でまつてから着替えるんだよ」

「わかつてますよ?」

「だつたらいいけど、これからは俺も出てから着替えてな

「?」

流石に年下の女の子、しかも家族とは言え裸を見ると照れてしまつからなあ。頼むから不思議そうに見ないでカンナ!!--

そんなこんなで着替え終わつたカンナと再び浴室に戻つてきていた

「とこひるでの兄ちゃん?」

「ん~?」

「何時に集合するんですか?」

「大丈夫、まだまだ時間はあるから」

「まだに起きる気配のないルナを見てカンナがベットに近づいて何かを呟いた

「は...く...ないと...わん...みるみる?」

「く...やー?」

「あ、す!」こ勢いで起きたなあ。なんていつたんだろう?

「おはよー、ルナ。って、何で涙目なんだ！？」

「ルナこれから早く起きるからーー！」

「ルナ、それじゃ主語が抜けてて言葉が通じないよ？」

「う、ううーーーー！」

と、こんなやり取りの後にしっかりと今日の予定を話してから俺だけ部屋を出た。だってさ、カンナといいルナといい俺がいるのに平気で着替えようとするんだもん

俺ってもしかしてお父さん的な位置に考えられてるのかなあ？でも、俺ってそんなに老けてるか？一応大学生くらいの歳なんだけどなあ

「お兄ちやんそんなんところでなに考えてるの？」

「悩み事？」

いつの間にか着替え終わって部屋から出てきたルナとカンナに心配そうに聞かれた

「ん？いや、何でもないよ。じゃあ行こうか」

「うん」

「はい」

生活区ロビーには集合三十分前といつのにティーダ、ヴァン、フィオナが楽しそうに会話をしながら待っていた

「お、アーチー早いじゃん。ルナとカンナも一緒に事は起こすのに時間でもかかったのか？」

「まだ三十分前ですよ兄さん？」

「リョウおはよー、つてみんな早いね」

なんだかんだ言つても俺たち家族はみんなの時間を大切にしてるんだよな

「うう、ルナも今度からは早くおさるもん」

「ティーダ、私はルナより早く起きた。遅れたのは私のせいじゃないよ」

「うう、カンナちゃんが苛めるよお兄ちやーん」

ルナは涙田で俺に抱きついてきた

「まあ、ルナも時間前には起きたんだしそんなに言わなくて大丈夫だろ？」

「兄貴、ルナには結構甘いよな？」

「やうか？俺はみんなに優しくしてるつもりだぜ？」

「む、そういう意味じゃねーんだけどなあ」

ティーダはぶつぶつと呟きながらヴァンと話をしていた。俺何か間違つてたか？

「兄さん、気にしなくても大丈夫ですよ」

「、ヴァンの声が聞こえたので気にしないことにした

と、それで買い物つてどこに行くつもりなの？」

「フィオナはどこが行きたい場所とか希望はあるか？」

「私はどこでもいいわよ」

「ふむ、どこでもいいと来たか。じゃあ適当にドライブとか周るかなあ

「じゃあ適当に街をみんなでぶらつくか？」

「俺はそれでいいぜー」

「僕もそれでかまわないです」

「ルナもそれでいいよー」

「私も」

「いいんじゃない、それで

との事なので俺たちは街をぶらつくことに決めた。移動手段確保のために前に買った車を車庫から引っ張り出してみんなを乗せた。このときルナとカンナのどっちが助手席に乗るのか壮絶な口論の後、結果じやんけんでカンナが勝利しルナがぶーたれてい

「ふふ、お兄ちゃんの隣の席です」

「は、はは。帰りはルナと交換してやれよ?」

「はい、ちゃんと交換します」

後ろの席からはルナの機嫌を直すのにティーダとフィオナが苦労していたのは言うまでもない。ヴァンは「まこと」一番後ろの席でドライブを楽しんでいた

はじめに来たのは某洋服店。ここでみんなの私服を買つていて。俺はライダースジャケットやチェックのパークー、ジーパンなどを今回は買い足した。

ティーダは髑髏が描かれている服を基本に買つていて、ヴァンはあまり興味がないらしく機能面の充実している上着やズボンを買つていた

ルナはいつの間にか皮手袋を買つていて。また、洋服店に皮手袋つて売つてるものなのか?

カンナはフィオナと一緒にいろいろと女の子らしい服を買つていて、フィオナはどちらかといつと男の娘?つて感じかな

次に来たのは電子機器専門店、ここに来た理由はヴァンが何かを買いたくて来たらしい

「なあ、何を買つんだ?」

「外付けのハードと書き込み用のウェアです」

「今家にあるやつじやだめなのか？」

「秘密ですよ」

此処での買い物が終わるとちょうど昼時になつてていたのでそのまま近場にあつたレストランに入った

そこで某パイロット兼コック・テ カワアキ に似た人に出会つた。  
といふか本人？

そんな感じで啞然としていたらみんなに心配されたのは言つまでもない。後で名前を聞いたら同姓同名でしかもコック見習いだそうだ

「好きなもの頼んで食べていいよ」

これが失敗だつたのかも知れない。俺たち男組みは以外に食べる量が決まつていてそんなに時間はからなかつたが女性人は違つた。会話を楽しみながらスイーツという名の食品を口に入れてはさらに注文しを繰り返し一時間ばかりそこで食事を楽しんでいた

その後はそこから歩いて食品専門のスーパーに向かつていた

「お兄ちゃん！……早く～」

先をトテトテと走りながらルナがこつちを見て手を振つていた

「おい、そんなに走ると危ないぞルナ」

「えへへ～だいじょ～ぶ！？」

言わんこいつぢやない。たちの悪そうな男一人にぶつかりルナは泣き  
そうな顔になつていた

「おい、お嬢ちゃん。痛いやないか」

「兄貴へどつしますか」のガキ?」

「「めんなさこ」、「めんなさこ」

仕方ないなあ、早く助けてあげないとダメだなあ。そつ思つて前に  
出でルナを助けよつとしたときに氣に入らない言葉が聞こえた

「「」のガキ拉致つてど「」かに売り飛ばしちまこませんか?」

「確かによく見ればガキやけどいい顔しとるな。高く売れるんやな  
いか。嬢ちゃんこつちきこや」

「ひ、い、イヤツ」

このとき、俺の理性は何か得たいの知れない何かに蝕まれていた

「なんや、兄ちゃん?なんか文句でもあるんか」

「正義ぶつてるんじやねーデコラツ……」

「お前、……し……た……か?」

「「」、「」、「」、「」、お兄ちゃん?」

ルナが泣きやんでこっちを見ていた。けどもつ止まれやうにない

「なんだ、ブルって声も出ねーのかあ、アアーー！」

「おい、やめとき。一般人にてえ出したらめんじゃくせ……い！？」

「あ、兄貴！？てめえ、何しやがつた！？」

腕をつかみそのまま投げ飛ばしただけだ、そつ驚くこともないだろ

「お、おい。アニキ、それ以上は人間としてやつちや駄目だわ」

「ティーダ、これは俺の問題だ。止める……な！？」

その時頬を強く叩かれたことよりもカンナが怒っていたことのほうが俺には驚きが強かつた

「力……ンナ？」

「お兄ちゃんは家族の前でそんなことは絶対にしない人です」

「これは……そつか、ルナこっちにおりで。」

「ふえ、うん」

トテトテと走ってきたルナを抱き上げ再び一人組みの前に立つた

「な、何だてめえ！…やんのか！？」

「俺の家族に手を出すのなら容赦はしない、おとなしく帰るなら俺

「向こうへやがー? ひーーー!」

「向こうへやがー? ひーーー!」

足元を軽く抉る様に蹴ると脅えたように男は兄貴と呼んでいたやつを引きずつて逃げていった

「兄さん、兄さんの優しさはほれしこうですがやつをほーなませんよー。」

「もう……だな。うそ、じゃあ買い物の続きをしようか」

「じゃあ、足りなくなつた食料買わないといけないんだろ? 早く行け!」

「俺はこの家族を……いや、今はこの時間を楽しむつて前に決めたんだ。今を楽しむなこと

「やだなあ、じゃあ急いで。暗くなる前に帰りたいしさ」

「うそ、早く行け!」

俺たちの買い物は無事に終わった。けどあの俺を蝕んだものは何だつたのだろうか？この身体にはまだ俺の知らない何かが隠されているのだろうか。けどあの神様はこんな能力をつけるなんて思えないしな

「はあ、なるべくキレないようにならないといけないな

今回のきっかけはルナを傷つけようとしたこと。これからはもつと家族に気を使わないといけないなあ

日常は繰返されることに意味がある。一度でもその繰り返しが崩れるとそれは一度と元には戻らない。だから人間は日常を大事にするのだろう

この人生、俺達の行き着く場所が幸福であることを祈つて

家族との買い物、前々から書いていたのですがよつやく書きました」とがでました。

次回もおわりくオリジナルストーリーになりかねないがどうぞお願いします

小説の紹介ですが、最近読んで読みやすいと思つた小説はわがみちさんの『転生？外史？だから何！？』この小説よりも完成度がかなり高い、ってか面白いので読んで見てください

もう一つは泣き虫カエルさんの『魔法の世界の魔術し！』これは私がこのサイトに来る前から読ませていただきさせてもらっていた小説です。HIMIや好きなら最高に面白いです

それではこれからもこの小説をよろしくお願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8638m/>

---

スーパーロボット大戦OG～チートで歴史を変える少年

2010年11月2日17時39分発行